

SDGsに学ぶ貧困について

浄土真宗本願寺派総合研究所 上級研究員

おかざき ひでまる
岡崎 秀磨

「お父さん買って欲しいもの決まったよ!!」

誕生日が近づいたある日、長男が満面の笑みで駆け寄ってきました。本当は値段が一番気になるのですが、とりあえず理由を聞いてみました。そうすると、こう答えました。

「○○君たちと遊ぶ時にいるから!」

なんだか私はその理由が気に入りませんでした。長男自身が本当に欲しいならともかく、友達と遊ぶために欲しいというのは少し違うのでは、と思ったからです。しかし、自分のことを思い返すと、同じものを持ってないことで仲間はずれにされたくないという恐怖感から、両親におもちゃをねだっ

たことがありました。また、ご門徒のおじいさんが、「本当はゲーム機を買うのは反対だけど、孫には孫のつきあいがあるから」とおっしゃっていたのも思い出しました。「他の誰かを基準にして欲しいものを決めて欲しくない」と思った私ですが、よく考えてみると、

「○○君たちもやってるし、プール教室行ってみない?」

「最近は大学行くのが当たり前だし、他の子と同じように塾に行かせようかな?」

などと、「他の人と同じように」が基準になっていることはかなり多いように思います。

二〇〇九年十月、日本政府（厚生労働省）が初めて「子どもの貧困率」を発表し、日本は先進国でも際だって高く、およそ七人に一人の子どもが「貧困」状態にあることがわかりました。確かに、ストリートチルドレンといわれるような、見ただけですぐわかる「貧困の子ども」を日本で見かけることは、かなり少ないと思います。ですから、実感として「子どもの貧困」を納得しにくいかもしれないませんが、日本には「貧困の子ども」が確かに多く存在すると言われているのです。これは、「貧困」を見ていく「ものさし」が変わったからこそ「見えてきた」のです。

では、その「ものさし」とはどういうものでしょうか。それは先の「他の誰かを基準にする」こと、もう少し言えば、「今の日本社会における普通との比較で考える」ことです。ですから、「ただちに命に関わる」問題ではありません。しかし、そうだ

からといって「ほっておいていい」というものはありません。なぜなら、私たちは「これぐらいが普通だからできて当たり前、やって当たり前」、「みんなしているのに私だけできないのは嫌だ」などと、「普通・当たり前」を基準にして行動することが多いからです。だからこそ、残念ながら子どもにはほとんど原因がないと考えられる金銭的な問題によって「普通」を選べない子ども、「普通」ができないことで、友達から、地域から、「社会の普通」から取り残されてしまう子ども、そうした「社会からの排除」によって生まれる「子どもの苦しみ」こそが問題だと考えられているのです。

何を「普通」と考えるかは人それぞれだと思います。だからこそ、あなたにとって見過ごせない「○○ができない子どもの苦しみ」を考えることから貧困問題を考え始めてはいかがでしょうか。

※SDGs（エスディーズ）とは…
国連で採択された貧困や教育、環境問題などの十七項目にわたる「持続可能な開発目標」。詳しくは、第二四二号にて解説をいただいておりますので、そちらをご覧ください。